市民タイムス
昭和46年(1971年)10月1日創刊 (第3種郵便物認可)

核廃絶へ心引き継ぐ

人類史上初の原子爆弾が広島に投下されて70年となった6日、爆心地に近い広島市中区の平和記念公園で平和記念式典が行われた。国内外から約5万5000人が参列し、松本地方からは松本、塩尻、安曇野の3市と池田町の中学生80人、県内の被爆者や遺族でつくる県原爆被害者の会の代表者が参加した。全国約18万3500人余（3月31日現在）の被爆者の平均年齢は、今年初めて80歳を超えた。被害の風化が懸念され、戦後の安全保障の転換など平和をめぐる問題が議論される中、被爆から70年の広島から、恒久平和や核兵器廃絶を願う強い祈りが発信された。（荘　隆子）

県被害者の会代表

松本の千国美津代さん

被爆体験 風化させぬ

県原爆被害者の会代表として、平和記念式典に参列した千国美津代さん（71）＝松本市大村＝は、11年前と6年前に続いて3度目の出席となった。被爆者の高齢化は県内でも深刻で、年齢や体力的な問題から式典に参加できない遺族も増えた。高校生らに原爆の惨状を語る中で、戦後生まれの世代に被爆体験を伝える難しさを感じ、戦争や平和に対する関心の低さに危機感を抱く。被爆70年の節目に「今が正念場。二度と被爆者を出さないために声を上げ続けなければ」と訴える。

千国さんは1歳3カ月で爆心地から1・5キロ離れた広島市内の自宅で被爆、母の実家があった松本へ家族と移住した。当時の記憶はないが、後に母から聞いた被爆直後の惨状に衝撃を受けた。赤ん坊だった自分を同じ家に住んでいた女性が守ってくれ、生き延びたことも知り、命の尊さを感じて生きてきた。だからこそ「多くの人の犠牲があって今の平和があることを忘れないで」と力を込める。

式典後、平和への願いを語る千国さん（広島市内で）

国会で審議中の安全保障関連法案に対しては、日本が長年貫いてきた戦争放棄の根本が揺らいでしまうのではないかと不安をぬぐえずにいる。最近は安保法制や平和問題を考える集いに足を運び、子育て中の母親や教諭らと意見を交わす。

県原爆被害者の会の元会長で、松本を拠点に平和運動を推進し平成21年に89歳で死去した前座良明さんは、千国さんの叔父だ。千国さんは「叔父さんのように勇気を持って人前で訴えることが、反戦や核兵器廃絶を実現する原動力になる。小さなところからでも行動を起こそう」と、地域で核兵器廃絶に向けた運動が強まることを期待している。